

『風流目付紋所』并ニかわり六じくわん入り』について

佐藤 悟

本稿は『風流目付紋所』と付録の『かわり六じくわん入り』を影印で紹介し、書誌解題、解題、翻刻、影印を付したものである。『風流目付紋所』は元禄十六年（一七〇三）に京都、菊屋七郎兵衛より刊行された目付絵であるが、現在知られる目付絵としては二番目に古いものである。また単独の目付絵として出版されたものの中では、現在のところ、最古のものと思われる。本書については他に伝本を聞かない。

最古の目付絵はパリ国立図書館に所蔵される元禄四年刊、『野老役者』の中に見える「花目つけ」である。同書については、二〇二一年一月三〇日に開催された演劇研究会において廣瀬千沙子「元禄期雛形本『野老役者』と野郎評判記―『としの花』の正体―」として発表され、さらに

同氏により、二〇二二年に「元禄期雛形本『野老役者』考―『としの花』への変貌」として刊行される予定である。

管見の内、三番目に古いものは享保十二年（一七二七）に刊行された黒本様式の街中のパフォーマンスを伴うおもちや油などの十六種の行商人を扱った『めつけゑ』（大英図書館所蔵）である。

目付絵は消耗品であり、十九世紀に刊行されたものすら伝存数の少ないことを考えれば、『野老役者』以前にも目付絵が相当数、何らかの形で出版されていたと想定すべきであろう。

江戸時代の印刷文化の発展とともに、このような消耗品ともいえるべき大衆向けの本が刊行されたことは容易に理解できる。ヨーロッパでも見られる現象であり、出版文化

の今後の研究課題としても重要であろう。

一 書誌

表紙 縹色 竪二二・六糎、横一五・六糎
題簽 二重匡郭（中央） 竪一五・三糎、横四・九糎

ふうりゅうめつけもんぢろ
風流目付紋所

并ニかわり六じくわん入り

菊屋板

見返し なし

本文 全九丁

丁付 一、四、五、六、七、八、一、二、三

刊記 「風流目付紋所」と「かわり六じくわん」の二

つの刊記を有する。

「風流目付紋所」刊記

元禄十六年^末正月吉日

京寺町松原上ル町

菊屋七郎兵衛新板

「かわり六じくわん」刊記

元禄十六年^末正月吉日

京寺町松原上ル町

菊屋七郎兵衛新板

二 目付絵とは

目付絵は二進法を利用した「あてもの」と呼ばれる江戸時代のゲームである。ここで紹介する『風流目付紋所』には冒頭に「見やうの事」という遊戯法を説明した文章があるので、それに沿って説明する。遊び方は『野郎役者』『めつけゑ』もほぼ同じである。最初の「口」には一から廿五までの番号を付した齣絵が描かれる。齣絵の内容は、本書では紋所であるが、他書では宝尽くであったり、役者の似顔絵であったりと、様々な題材から選ばれている。本の持ち主はゲームの相手にその齣絵の中の一つに目を付けてもらい、頁を繰るごとに、その齣絵が左右のいずれにあるかを訊ねる。右側の頁には「右一」「右二」「右四」「右八」「右十」と記され、左側には「左」と記されるだけである。この説明は『野老役者』『めつけゑ』も同じである。本の持ち主は相手が指摘した齣絵が右にある場合は数を加えていくと、その合計は「口」にある齣絵に付した番号と一致する。二進法の原理を知らない相手はその結果に驚くというものである。

二進法であるならば最後は「右十」ではなく「右十六」とあるべきであるが、「右十六」とすると十六番以降の十図しか描くことができない。さらに最後の「左」は省略さ

れているので、図柄としても寂しくなる。「右十」にする
と十番以降の紋所をそこに描くことができ、本書でも「右
十」には十一番の「かめのまる」が描かれている。またそ
の頁の紋所の齧数も十五齧と賑やかである。さらにいえば、
十の方が十六よりも計算しやすかったのかも知れない。最
後が「右十」になるのは『野郎役者』『めつけゑ』も同じ
ある。

ところが『風流目付紋所』の作者は「右十」で十九番の
「八やう山ざくら」と十番の「かめのまる」を取り違えて
しまっている。「八やう山ざくら」は「右二」「左」「右
八」「左」となるので、数字を合計しても九にしかならない。
九番の「ふじひし」と区別がつかなくなっている。「かめ
のまる」は「左」「右二」「左」「右八」「右十」なので、数
字を合計すると二十となり、二十番の「みるにほたてがい」
と同じになる。これではもはや遊戯本としては成り立たな
い。

このことから目付絵の齧の配当は二進法の原理により
ながら、経験によって製作されていたことを窺える。本書
は遊戯本としての欠陥があるので、実際にはあまり使用さ
れなかったと思われる。それが本書を今日まで伝存させた
一因であったのかも知れない。

三 紋所について

紋所は本来、敵味方を識別したり、所属を示すために使
用されてきた。そのため関心も高く、舞の本「夜討曾我」
は紋尽しの場面が見せ場でもあった。紋所については古く
から武家の紋を扱った「武鑑」が刊行され、『御紋づくし』
のように紋章に焦点を当てた紋尽しも刊行されていた。遊
里でも遊女は独自の紋を持ち、『色道大鏡』は遊女の紋に
わざわざ一章を立てている。遊女評判記にも遊女の紋が多
く描かれる。遊女ばかりか、遊客も遊里では自らの素性を
隠して替名を持ち、さらに替紋として独自の遊紋を付けた
例も散見する。役者や芸人もその門流を示したり、独自の
紋を使用している例が多目見られる。鼯頁にとって役者の
紋は関心の対象であって、元禄五年刊『広益書籍目録大全』
には「野郎双六」、元禄九年刊『増益書籍目録』には「冶
郎双六」として役者の紋を扱った双六がみえる。家紋のよ
うな固定化した紋は別として、様々な場面で紋は絶えず変
化し、その図案の妙を競っていたと考えられる。書名に見
られる「風流」の二字は、本書に描かれた紋が遊戯と結び
ついた紋であることを端的に示している。板元の菊屋七郎
兵衛は本書と同時に「替紋所双六」を刊行している。双六
の名に「替」がついているので本書と同様の性格のもので

あつたと思われる。

本書では二十五の紋所を取り上げているが、家紋に使われるような紋もあれば、「九 ふじひし」や「廿二 さくらにかりがね」のように歌の心を紋章化したと思われるものもある。また伝統的な図鑑を紋に描いたものもある。不明なものも多いが、判明したもののだけでも注を付けると以下のようになる。表記は「口」に従い、() 内に漢字を充てた。

- 一 ねぢぎく(捻菊) 菊の花びらの芯を中心にねじったように重ね合わせた図柄で捻鬼菊がよく知られている。
- 二 とうぎり(唐桐) 唐桐は緋桐の異名であるが、光琳唐桐とよばれる図案に近い。
- 三 あをひの丸(葵の丸) 三葉葵、葵巴などとしても知られる賀茂社の神紋から発した紋所である。この葵紋は徳川氏が用いた三葉葵とは異なる。
- 四 はなたち花(花橘) 紋所としても知られている。
- 五 二つめうがのまる(二茗荷の丸) 紋所として知られる茗荷紋と同じである。
- 六 むめにうぐひす(梅に鶯) 図案としても用いられる。
- 七 ふじどもへ(藤巴) 紋所として知られる。
- 八 九ようともへ(九曜巴) 九曜の星紋の星を巴に替えた紋で板倉巴としても知られている。
- 九 ふじひし(藤菱) 藤菱は紋所として知られているが、この紋は中央に「松」の字、その周囲に菱形に藤を配している。『後撰和歌集』所収「みなその色さへ深き松がえにちとせをかねてさける藤波」などの和歌の心を図案化した遊紋と考えられる。
- 十 かめのまる(亀の丸) 紋所としてよく知られた紋で、家紋としても用いられる。
- 十一 たけの丸ニすゞめ(竹の丸に雀) 紋所で伊達家の家紋として知られる。
- 十二 たけのまる(竹の丸) 笹の丸とも呼ばれる紋所である。
- 十三 だきたかのは(抱鷹羽) 紋所としてよく知られている。鷹の羽が左右から向かい合った形の紋所である。家紋にも見られる。
- 十四 ゑだぼたん(枝牡丹) 牡丹と枝を共に描いた紋所で家紋にも見られる。

十五 こうぼねぐるま（河骨車） 八本骨の河骨車紋である。

十六 かたてしゆるふ（片手棕櫚） 棕櫚は紋所に用いられ、櫻欄丸などその種類は多い。

十七 むかいうさぎ（向かい兎） 兎紋は家紋にも見られ、向かい兎はその一つである。

十八 くわんにてう（鑲に蝶） 五つ鑲紋に蝶紋を重ねた紋所である。

十九 八やう山ざくら（八葉山桜） 丸に花紋の周囲に八枚の山桜の花弁を配した紋所である。

二十 みるにほたてがい（海松に帆立貝） 海藻の海松と貝を取り合わせた工芸品などに散見する模様に基づく紋所である。

廿一 いづ、くづしともへ（井筒崩巴） 六角井筒に三つ巴紋を重ねた紋所である。

廿二 さくらにかりがね（桜に雁がね） 『古今和歌集』所収の伊勢「春霞たつを見すててゆく雁は花なき里 住みやならへる」の歌の心を紋所としたものである。

廿三 丸にき、やう（丸に桔梗） 紋所としてよく知られている。

廿四 やなぎまじり（柳鞠） 鞠と鞠場の柳を取り合わ

せた図様に基づく紋所。

廿五 かうのづにさくら（香の図に桜） 源氏香の図

と桜を取り合わせた図様に基づく紋所。源氏香を題材とした紋もあるが、源氏香が五本であるのに、本図は六本を使用している。

四 「六字丸」

「六字丸」は独立した刊記があることから、本来は独立したパンフレットのようなものであったにちがいない。「六字丸」の「六字」とは「南無阿弥陀仏」という六字の番号のことであり、それに「丸」をつけて薬のように見せかけ、薬売りの口上になぞらえて念仏の功德を伝えようとした戯文である。念仏の功德を薬にたとえ、「六字丸」としてその功德を称揚することは『万病六字丸功能』（写本）などにも見られ、僧侶の手すさびとして、行われていたのかもしれない。印刷されたということは、単なる手すさびではなく、他の芸能等との関係も考慮に入れるべきかも知れない。

この作品は仏教史の中で念仏の優れていることを強調し、本文中には曇鸞・道綽・善導・懐感・少康の浄土五祖のうち、曇鸞・道綽・善導について触れ、源空（法然の諱）

の功績を称えている。本文中でも念仏の優越性についての主張がたびたび繰り返される。巻末には「此御くすり御用にて候はゞ、御当地にてはにしあみたがはら、くわんおんみんのかたはら、せいしあんと御尋なされませい、代物はわづか六文でございまするぞ」とあり、これは阿弥陀如来の脇士である観音菩薩と勢至菩薩を利かせたもので、板元の住所ではない。阿弥陀如来は浄土宗の本尊であり、六字丸の売り広め所を「せいしあん」とするのは、法然の本地が勢至菩薩、あるいは法然が勢至菩薩の化身であるという信仰に基づいている。これらも、「六字丸」が浄土宗を称揚し、念仏の功德について触れた戯文ということが出来る。

しかし目付絵と「六字丸」は全く無関係である。なぜこれが合綴して刊行されたのであろうか。二十五齣の目付絵は六丁で完結する。江戸の草双紙の場合は五丁一冊が本替えの単位であったと思われるから、見返しや奥目録を使えば、一冊の本として完結することができる。ここでは、飛び丁分の丁数に当たる三丁が補われていることから、上方は一冊九丁が、他の書肆との本替の単位で、交換するには丁数が不足していたのではないかと、いう仮説を提示するにとどめておく。だからこそ刊記が二重に記されるという不手際な体裁となったのであろう。

五 菊屋七郎兵衛について

菊屋七郎兵衛は浮世草子の板元として重要な板元である。また浄瑠璃本を始め、多くの本を刊行し、近代に至っている。菊屋の刊行物は求板ものが多いことが特色である。例えば、元禄九年刊『増益書籍目録』には『諸国百物語』五冊が掲載されるが、その刊記には「延宝五丁卯月下旬京寺町松原上ル町 菊屋七郎兵衛板」とある。板元名は入木と思われ、墨色が異なる。菊屋板には同様の例が多く散見する。『増益書籍目録』に見える元禄二年刊「諸人一代八卦」のような確実に菊屋七郎兵衛の開板と認められるような本のデータを蓄積することが、菊屋の起立について言及するには必要である。

本書には元禄十五年と元禄十六年の新版目録が掲載されているので、それについて考察を加えてみたい。

元禄十五年の新刊は「去年ノ年の新板」として『武道大かゞみ』全八冊と『好色大振袖』全五冊が挙がる。「武道大かゞみ」は元禄十五年刊『武士国土産』を指し、貞享四年（西川太兵衛・河勝五郎右衛門）刊『武道一覽』の求板改題本であることが長谷川強によって指摘されている。^(注1)『好色大振袖』は貞享五年刊『好色大神楽』（井筒屋九郎兵衛刊）の求板改題本であることも指摘されている。『好色大振袖』

は第一巻しか伝存していないので、本目録により菊屋七郎兵衛が板元であることが判明する。『武士国土産』の刊記は「元禄十五年六月吉日 江戸日本橋川瀬石丁 須藤権兵衛 京都寺町松原上ル町 菊屋七郎兵衛板行」とある。元禄十五年の菊屋の刊行物は求板を新板として売り出したのである。

元禄十六年の新板は本書のほか、「鳥魚双六」と「替紋所双六」という双六が二点とあり、菊屋七郎兵衛が遊戯本や実用書、求板本の刊行によつて細々とした商いをしていたような印象を与える。この二枚の双六は確認されていない。双六も目付絵同様の消耗品であつた。しかし正月中に『風流今平家物語』が刊行されることを予告している。

『風流今平家物語』は西沢与志（一風）作『風流今平家』のことで、『武士国土産』奥目録にも「風流平家物語 全部十二冊」として予告されている。^(注2) 求板本ではなく、新刊本である。『風流目付紋所』奥目録には「当月中」と正月刊行であることが、予告されているが、『風流今平家』の刊記には「元禄十六歳未弥生上旬 京寺町松原上ル町 菊屋七郎兵衛新板」とあり、実際の刊行は三月であつた。菊屋七郎兵衛は西沢一風の浮世草子をこれ以降独占的に刊行し、板元としての成長を遂げていくことになる。元禄十六年は菊屋七郎兵衛にとって転換点とも言うべき年で

あつた。

六 『風流目付紋所』本文翻刻

風流目付もん所 見やうの事

めつけもん見やうは 口の一二三のばんつけのある所の廿五のうちにて一つにめをつけをき さて其つぎを見て右にあるか 左にあるかとふに 右にあるといわゞ かずを見て 又つぎをとふて 左にあるといはゞ 数にいれず おわりまでかくのごとく 右といはゞ かずに入 扱数いくつとあはせ めやすの数をみて これといふべし 其ために右左といふ字をかき 其下に一二四八□□かくのごとくしるしをくもの也 (一オ)

- 一 ねぢぎく
- 二 とうぎり
- 三 あをひの丸
- 四 はなたち花
- 五 二つめうがのまる
- 六 むめにうぐひす
- 七 ふじどもへ
- 八 九ようともへ

- 九 ふじひし
 十 かめのまる
 十一 たけの丸ニすゞめ
 十二 たけのまる
 十三 だきたかのは

(1ウ)

- 十四 ゑだぼたん
 十五 こうほねぐるま
 十六 かたてしゆるふ
 十七 むかいうさぎ
 十八 くわんにてう
 十九 八やう山ざくら
 二十 みるにほたてがい
 廿一 いづゝくづしともへ
 廿二 さくらにかりがね
 廿三 丸にきゝやう
 廿四 やなぎまり
 廿五 かうのつニさくら

(4オ)

右一
 ふじひし むかいうさぎ だきたかのは こうほねぐる

ま ふじどもへ あをひの丸 丸にきゝやう ねぢぎく
 八やう山ざくら 二つめうがのまる たけの丸ニすゞめ
 いづゝくづしともへ かうのつニさくら (4ウ)

左

はなたち花 とうぎり 九ようともへ むめにうぐひす
 かめのまる たけのまる ゑだぼたん かたてしゆるふ
 みるにほたてがい くわんニてう さくらニかりがね や
 なぎまり (5オ)

右二

あをひの丸 みるにほたてがい こうほねぐるま かう
 のづニさくら とうぎり ゑだぼたん ふじどもへ かた
 てしゆるふ むめにうぐひす いづゝくづしともへ かめ
 のまる むかいうさぎ やなぎまり (5ウ)

左

ふじひし 丸にきゝやう 二つめうがのまる くわんに
 てう 九ようともへ さくらにかりがね 八やう山ざくら
 ねぢぎく たけの丸ニすゞめ はなたち花 だきたかのは
 たけのまる (6オ)

右四

だきたかのは はなたち花 二つめうがのまる むかい
うさぎ かたてしゆるふ ふじどもへ かうのづニさくら
こうほねぐるま ゑだぼたん むめにうぐひす たけのま
る やなぎまり さくらにかりがね 丸にき、やう

(6ウ)

左

あをひの丸 とうぎり 九ようともへ ふしひしい
づ、くづしともへ ねぢぎく 八やう山ざくら くわんニ
てう たけの丸ニすゞめ みるにほたてがい かめのまる

(7オ)

右八

九ようともへ みるにほたてがい だきたかのは かう
のづニさくら くわんニてう ゑだぼたん さくらにかり
がね こうほねぐるま 丸にき、やう たけのまる い
づ、くづしともへ ふしびし かめのまる 八やう山ざく
ら やなぎまり

(7ウ)

左

とうぎり たけの丸ニすゞめ むかいうさぎ ふじども

へ あをひの丸 二つめうがのまる はなたち花 かたて
しゆるふ むめにうぐひす ねぢぎく

(8オ)

右十

たけの丸ニすゞめ 丸にき、やう みるにほたてがい
かめのまる かたてしゆるふ くわんにてう いづ、くづ
しともへ やなぎまり むかいうさぎ さくらにかりがね
かうのづニさくら

(8ウ)

未ひら正月新板

一風流紋所目付 壺冊

并ニ六字丸

一鳥魚双六 絵本壺枚

一替紋所双六 絵本壺枚

右の本新板ニ出シ申候 御なぐさみ物ニ候間御求可被下

候

又当月中ニ

一風流今平家物語ひらかな全ぜん部ぶ十二冊 作者西沢

昔の琵琶を引かへ 当世たうせいのうわさを 琴ことば三味線みせんに合あして

よしといふ瞽女ごぜこれをかたる

右此本おもしろき御なぐさみに成候間御求被成御覽可被

下候

元禄十六年未正月吉日

京寺町松原上ル町

菊屋七郎兵衛新板

去年ノ年の新板

一 武道大かゞみ 全部八札

并ニてがら日記 ちらかな忍入

一 好色大振袖 全部五冊

右御もとめ下さるべく候

(一オ)

名方四十八味六字丸もちいやう

いづれもさま御たちよりなされまして、御もとめ被成ませ
い。是は一さいのあくがうのやまいをいやしまするめうや
く、此六字丸ならではござりませぬ、むかしとつといせん。
ほうそうあんと申ますが、五かうが問御しあんなされて、
四十八色のやくしゆをあつめ、てうさいやうかうのうち、
せいほうのうへにて、御てうがうなされたるめいほうでこ
ざる、その、ちかたしけなくも、天ちくにて、しやかと申
名医けこん丸とて、一さいきやうのみのりにてまろめ、ね
はんのゆふべまで御ひろめなされたるに、すこしもいつわ
りのないめうやくちやと御ざりまして、十方のほんだう外
科いしや衆も、じやうこにたておかれ、それより此かた三

国にかくれなく、きめうがあらわれて御ざる、さて又大唐
(一ウ) にも六十万をくふたいのいしや衆も、此くすり
にてまんびやうをいやしたとあつて、四百よしうのてんや
く衆も、一人として此六字丸をもちいられぬはまれでござ
る、その中にも、此ほうをとくと御ぞんじなされて、おほ
くのやまいをりやうじなされたるは、どんらん庵、だうし
やく庵と申ししやでござ候、べつしてぜんだう庵には此六
字丸の本方を、ほうぞう庵よりつたえへなされ、ずいぶん
りやうじがはやつたと申、我朝へはきんめい天皇の御宇に
はじめて、わたりまして御ざる、五千余くはんのくすりば
こに一つとして、此六字丸のそふてわたらぬはないと申、
それよりしやうとく太子庵と申が、さいしよにひろめなさ
れ、永観、空也、行碁、恵心など、申ししやがたのあまね
く、ひろめなされたれども、本方をとりうしない、いろ
くの和葉をげんじちがへ、かい、きやうの自力をもつて、
きんやくせられてござるゆへに、人々きんかう物のくいあ
わせなどにて、もちい様もぞんぜませなんだ(二オ) ゆへ
に、なか／＼十あくのやまい、五ぎやくの大病はいへかね
まする、しかる所に源空庵と申が、いろ／＼と本方の六字
丸をせんさくなされ、ゑいざんのくすりばこをせんご、八
へんまで御せんさく被成、そのち大唐にて、善導庵より
六字丸の本方を、くはしくうけとり、なされたと申は、あ

りかたき事で御ざる。それより此かた六十六ヶ国に、本方をひろめ末代のたからとなつてござる。かたしけなくも、一天のあるじ白河法皇、高倉院、後鳥羽院、源空庵を内裏へめされ、天子の御みやくをかんがへ、此六字丸をす、められてござる。四百四病のうわもり、生死一大事のやまいをいやしなされたと申、いまにいたるまでげくわ、そのほかのやぶいしやにいたるまで、手がらをいたすと申は、此六字丸のきどくでござる。まづき、まする能毒が第一心をやはらげ、じひをおこし、しやうじきのつやをいだし、うわき、けんくわ、口論のつかへを治し、とんよくしんるのしうしんをさり、ぐどんあくぢをちらし、もと(2ウ)より手のうちには、せつしやう、ちうとうのやまいをしやうせず、口中一さいにもちいて、きご悪口もうご両せつつてのやまいをいやします間、右申たる六じくわん、ねさまにもおきさまにもしよくごしよくせんにも、けたいなく御もちひなされませい、しやけんおん酒の二日ゑひも、をのづからさめますぞ、せけんをいていろくくの銘を打、真如実相丸、即身成仏散、名体ふり薬等などと、かんばんをにらはし、ひろめんといたしますれども、これらのくすりは、せいほうがむつかしく、薬味も高直に御ざる。そのうへいろくとなりかたくむつかしき、きんもつどもござるゆへに、まづ上根上智の、のみ汁をこしらへませねばなりませ

ぬ、そのやうなる薬は、いづれもさまのやうなる、ひるねまどいのおきこん、では、けつくくすりがあたりてあしうこまります。此六字丸なにものみ汁もいらす、たゞこの薬にていゆる、ほんぶくけつじやうと□□がひなく、一りうなり(3オ)とも十りうなり共、御もちひなされませい、そのうへ五しんにくぐいなどのまいりあはせをもくすりにはさしあひませぬ、かくのことくにりうにござりますれば、八十九はぐきばかりのちゞ様はゞさま、二才三才のまだはもはへぬあまいからの、あぢわいごぞんじなふても、此六字丸まるのみになされませい、そのまゝ、いかやうのがうびやうぼんのふこわしやうふかき、やまいもいゆるきめうふしぎの名方で御ざる、御ゆだんのさしおこりませぬやうに、へいぜいちやくにめしあげられて、とかく口をはなさぬやうに、なされ候へば、しよ病はなをりまするぞ、とんびやうとんしの世の中でござりますれば、すこしもはやう御もとめなされませい、此御くすり御用にて候はゞ、御当地にてはしあみたがはら、くわんおんゑんのかたはら、せいしあんと御尋なされませい、代物はわづか六文でござりまするぞ

元禄十六年 未正月吉日

京寺町松原上丸町

菊屋七郎兵衛新板(3ウ)

注

(注1)長谷川強『武士国土産』その他——考証三条(『浮世草子新考』汲古書院、一九九一年、初出、一九五九年)

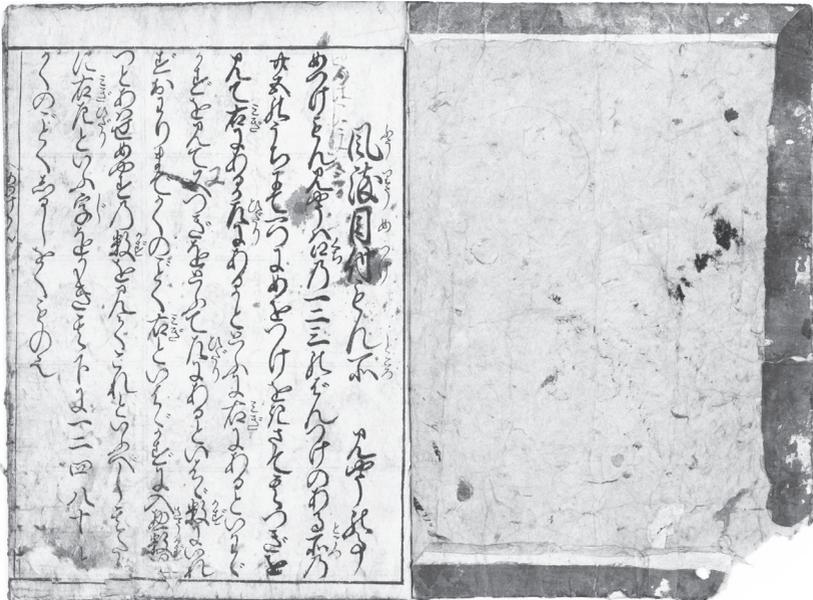
(注2)『風流今平家』は初印本の存在が確認されず、最初は六卷六冊として刊行される筈であったとされる(『西沢一風全集』第二卷、川元ひとみ執筆解題、汲古書院、二〇〇三年)が、『武士国土産』の奥目録にも全部十二冊とあり、本書の奥目録にも十二冊とあることは注目されてよい。

本稿は科学研究補助金基盤研究(B)(17H02311)「近世期挿絵本や絵本にあらわれる画題の変遷による近世挿絵史の再構築」によるものである。

(ささこ) ささこる・実践女子大学教授



風流目付紋所①（表紙）



(1才)

風流目付紋所②

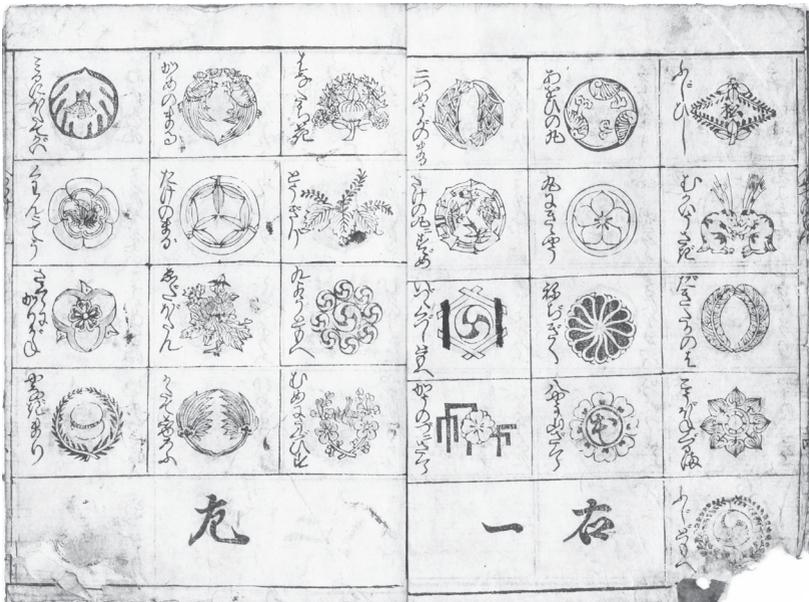
(見返し)



(4オ)

風流目付紋所③

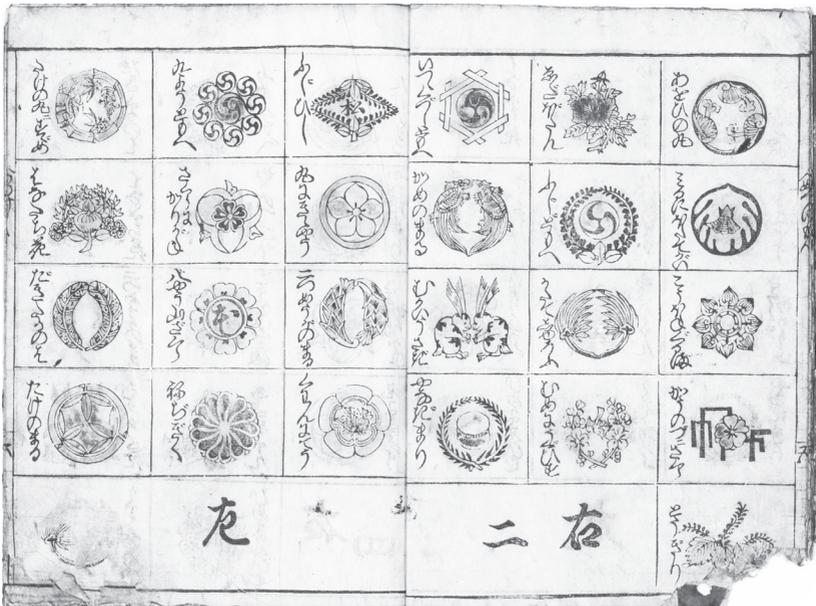
(1ウ)



(5オ)

風流目付紋所④

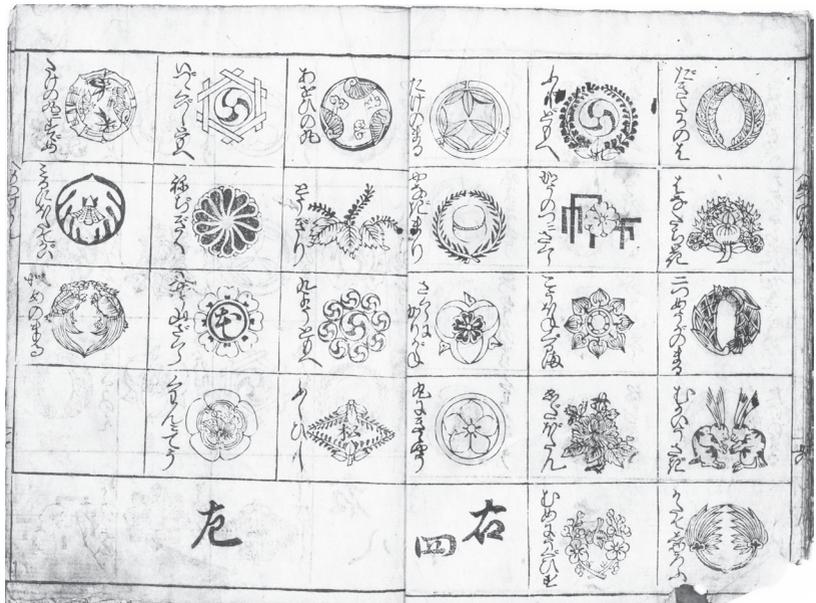
(4ウ)



(6オ)

風流目付紋所⑤

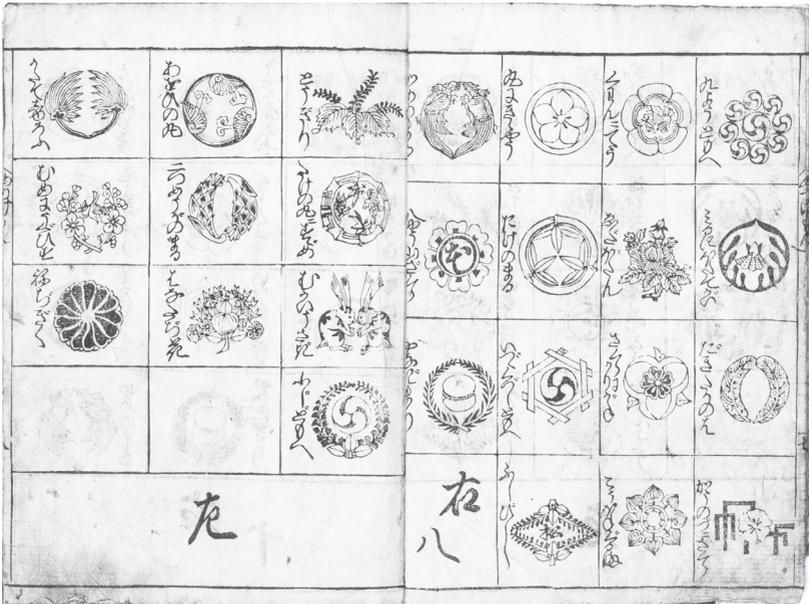
(5ウ)



(7オ)

風流目付紋所⑥

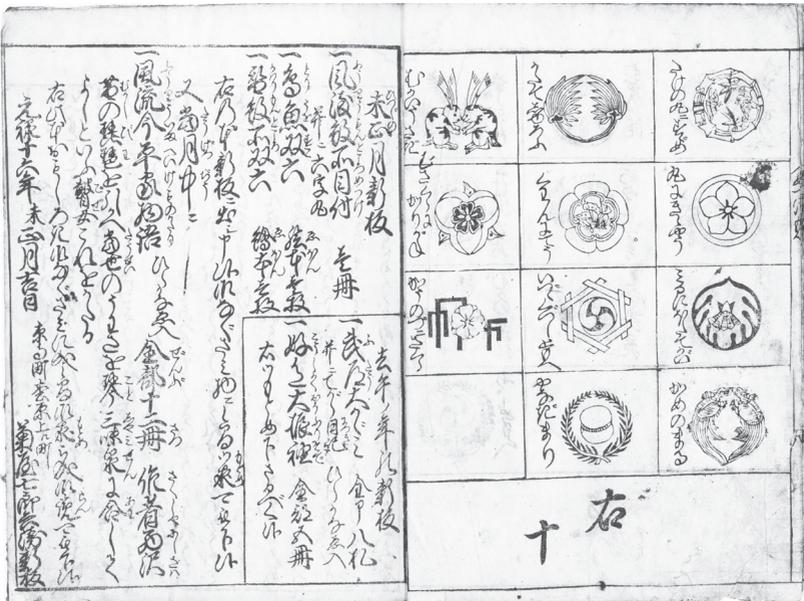
(6ウ)



(8才)

風流目付紋所⑦

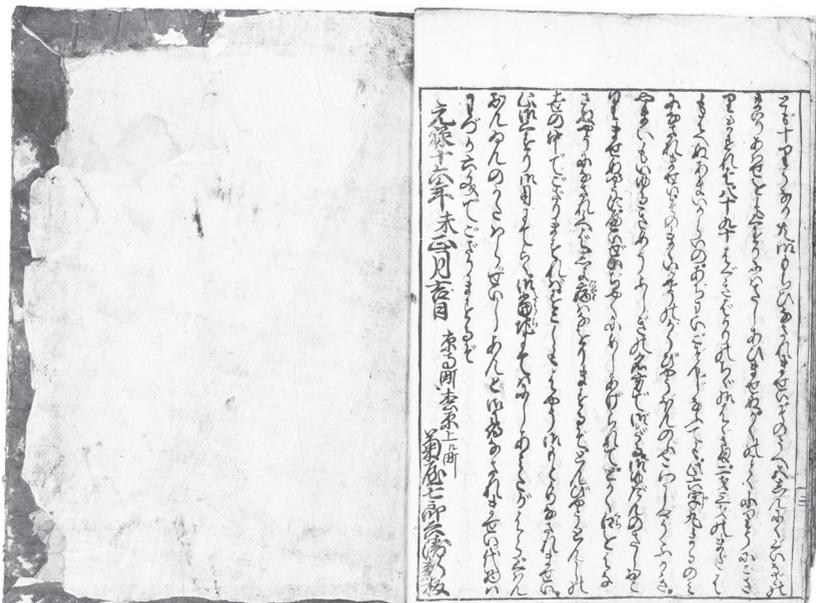
(7ウ)



(1才)

風流目付紋所⑧

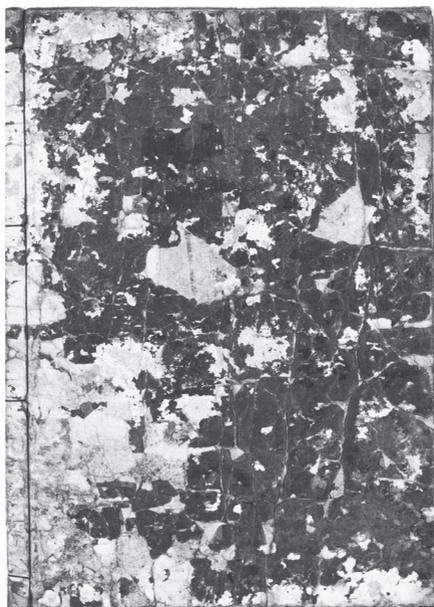
(8ウ)



(裏表紙見返し)

風流目付紋所⑪

(3ウ)



風流目付紋所⑫ (裏表紙)